がいつもある。

3、フィールド調査がしにくいので、口承文芸学や民俗学のような対面による調査を基にした発表がしにくい。

4、対面でないため何となく疎外感がある。発表以外の個人的な会話がしにくく、未知の人との出会いの場になりにくい。

（しげはら・ひろし／愛知県）

◆山田栄克

本学会が大切にしてきたものの一つとして、言葉、特に声がある。研究例会は、その多くをシンポジウムの形をとっており、発表者ではなくパネリストからの意見を受けて会場内での質疑応答を経て、考えを深めていこうとする。これは開かれたものであり、例会委員に貫かれたものであろう。新型コロナの中で、延期や中止、今大会の研究発表のように文字による意見交換はもちろん検討されたが、やはり開かれた存在でありたいという考えから例年通りに近い方法はないか模索した。また、来年は二〇一二年から研究例会で取り上げてきた東日本大震災の三・一一から十年ということで、その時しかできない内容であって、この問題を後ろ倒しにすべきではないということも検討された。そういった思いでオンラインも用いた例会を十一月に予定した。こんな非日常が続く中だからこそ、それまであった日常を少しでも取り戻していただければと願う。

（やまだ・ひでかつ／東京都）

【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】「コロナ禍」を「福」に転じるための覚書
―『伝え』六七号から見えてくるもの―

佐藤　優（会報委員長）

『伝え』第六七号では、「密接」が忌避される厳しい状況下にも関わらず、研究及び各地の語り手の会等で精力的に活動をされている三人の方々からの調査や実践報告を紹介している。

具体的には、愛知県の枝下用水資料室で精力的な研究活動をされている達志保氏からご報告をいただいた。また、日本民話の会などの活動に長年携わっておられる米屋陽一氏、市川民話の会においてご自身も語りの実践経験豊富な根岸英之氏のお二方から、語り手の会などに関するご報告をいただいた。この詳細は、『伝え』をお読みいただきたいと思う。

お三方の報告で印象的だったのは、人と人とが集まり、そこから生まれる会話や語り、それに付随する活動について言及していることだった。これらの報告は、「新しい生活様式」が提唱され、人と人との密なる関係性が忌避された結果、逆説的に実際に顔と顔とを付き合わせて話しを語り・聴くという密接をともなう営みの重要さを改めて私たちに気づかせてくれるものだった。口承文芸学は、数知れないこのような営みの累積から成り立っている。私たちは、このことを忘れてはいけないだろう。そうした営みの興味深い一例を具体的に取りあげてみよう。

七日は朝各戸を巡った末にやっと見出した伝承者、嵯峨美代さんのお話を伺った。（中略）嵯峨美代さんは当時七十九か八十才とのことでお医者様のお宅のおばあさん。ずっとこの村で育たれた方である。（中略）「昼まムカシを語ると、山男にさらわれる」といわれていたが、このタブーを尊重するほど、余裕はなかった。また昼間は停電時間であったにもかかわらず、おばあさんのお話を録音したいという私どもの切なる希望を入れて、遠くにある村の自家発電所へかけつけて送電して下さる方があった。生涯忘れられない川井の昼まムカシであった。[1]

これは、昭和三十四年（一九五九）八月、岩手県九戸郡山形村大字川井地区（現在の岩手県久慈市山形町川井）において國學院大學説話研究会がおこなった調査報告である。重い録音機器を背負い込み、汗にまみれながら美代媼の語りに耳を傾け、その語りを録音する意義を熱心に説明した都会から来た若者。その思いを汲み取り、日中は停電時間にも関わらず村の自家発電所へ送電のために走ってくれた山形村の方々。この調査は、両者の密なる関係性からなし得たものだったといえよう。[2]また、口承文芸資料集に記録されていることばは、「インフォーマントとフィールドワーカーとのかかわりの中から現象されてきた言説」[3]と指摘されているが、それを生み出す前提として語り手（話し手）と調査者の密なる信頼関係が担保となっており、それは対面を通じて醸成されるものだといえる。

こうした事例をふまえてみると、新型コロナウイルス感染症の流行が長期化する中、「密接」を避けながら対面を伴うという難しい課題に直面し、私たちは戸惑いながらもこれと向き合い続けてきたのが、この半年といえるのではないか。このような現状をふまえて、米屋氏や根岸氏も指摘しているようにＬＩＮＥやＷＥＢ会議システムを利用したオンライン上での語りの実践が当面なされてゆくだろう。あるいは、コロナ禍以前からおこなわれている動画共有サービス上で語りをアップしていくことは、今後も増加すると思われる。[4]さらに、感染者の比較的少ない地域では、感染症対策を充分に講じた上で、対面での調査や語りの実践をおこなうことも今後段階的に実施されてゆくだろう。

だが、新型コロナウイルス感染症の流行は、しばらくの間、終息する気配は見えない。立ち止まっていても「語り手は歩いてこない」[5]のである。戸惑いながらも調査研究・語りの実践を継続していくことで、かえって見失っていたものが見えてくる可能性もあるのではないか。現在このウイルスを原因とする世界を取り巻く様々な状況を「禍」とのみとらえず、「塞翁が馬」

の故事に倣い、「福」と転じるような歩みを進めていきたいと考えている。

注

（1）國學院大學説話研究会調査報告「岩手県九戸郡山形村山形（旧川井）の昔話（一）」芸能学会編『芸能』第二巻第一一号一九六〇　芸能発行所　一八―一九頁。

（2）飯倉義之「「採訪」の技術史―國學院大學学生研究会 口承文芸採訪の五〇年―」國學院大學説話研究会・國學院大學民俗文学研究会ＯＢ有志編『学生研究会による昔話研究の50年―フィールドワークの記憶と記録―』二〇〇五　自刊　五―四六頁には、録音機器の変遷や同研究会のこの時期における調査状況など興味深いエピソードなどが詳細に報告されている。

（3）高木史人「昔話は世につれ、世は昔話につれ―学生研究会の昔話集・資料集小史、あるいは昔話集・資料集の社会史・その一―」注（2）二一三頁。なお、高木氏は、こうした視点を「共＝競演」という視座でとらえようとしている（高木史人「「昔話」の解釈・再考」名古屋経済大学経済学部20周年記念論集編集委員会編『名古屋経済大学経済学部20周年記念論集』二〇〇〇　名古屋経済大学（27）―（47）頁を参照）。

（4）口承文芸ではないが「北上・みちのく芸能まつり」が、十月十七日（土）と十八日（日）に北上市文化交流センター・さくらホールで無観客で開催された。その模様は、ＹＯＵＴＵＢＥでライブ配信された。民俗芸能の場合、コロナ禍以前から公演の様子をネット上にアップすることがおこなわれている。口承文芸研究者もこうした民俗芸能研究における記録と実践について学ぶべきことが多いと感じている。

（5）引用の詳細は、注（3）二〇〇五年論文一九四頁を参照。

（さとう・まさる／盛岡大学）

【緊急特集　新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

アマビエ考
―コロナ禍のなかの流行神―

伊藤　龍平

はじめに　――コロナ禍の空気のなかで――

今年七月、台湾雲林県口湖郷で催された牽水轞（チェンシュエザン）というお祭りを見に行った。清朝時代、数千人が亡くなる大水害があり、その霊を慰めるために始まった行事である。群衆の中を歩きながら、そういえば、この夏は日本の祭りのほとんどが見られなかったんだな、と思った。コロナ禍以前の日常生活を送れている珍しい地域が、台湾だった。[1]

新型コロナウイルスの流行以降、人々の生活様式も改変を強いられている。気になるのは、これが「一時的な日常」に収まるのか「新しい日常」として定着するのか、という点である。今年は日本各地で伝統行事が中止されたが、[2]これが一時的な日常なら、早晩、元の形に復元されるだろう。しかし、新しい日常になるのならば伝承の変容は避けられず、消滅する可能性もある。予断が許さない状況だが、仮に伝承が変容するのなら、どこがどのように変容し、どこが変容しなかったのか、その理由は何か、といった点が問題になる。

また、新しい日常にも二タイプあることには留意したい。一つは、もともと来るはずだった未来の日常が早まって到来しただけのもの。テレワークやオンライン授業・飲み会などは、コロナが流行しなくてもいずれ浸透していただろう。もう一つは、本当に新しい日常で、欧米圏でのハグ・キス・握手などの文化がこれからどうなるか、興味深い。

新しい文化事象には、可能な限り古い研究方法で対処して思考実験するのが有効だと思っている。できるだけ従来の方法で対処し、対処しきれなくなった部分が新しい点である。方法の臨界点を探る試みと言ってもいい。コロナ禍を例にすると、ウェブ上での昔話の語りの会などは、一見、新しく見えるが、多対多のネットワークコミュニケーションではなく、一対多のマスコミュニケーションである点や、語り手と聞き手のインタラクティブな交流がない点など、性質的にはテレビに近い。従来の